

三 歴史資料調査の成果

はじめに

江戸時代を通じて越中の東本願寺派(現真宗大谷派)の触頭寺院であった善徳寺には、絵画・彫刻・什器類や文献資料が数多く残され、かつ保存の状態も良い。また寺務を兼帯した看坊五か寺などにも歴史資料が残されている。これらの歴史資料の存在は、当地の最有力寺院であった善徳寺の歴史とともに、南砺地方を基点として形成された真宗勢力による越中支配、さらに北陸の真宗王国成立の背景を解明するためには欠かせない。そのため善徳寺などの資料調査を徹底し、成果を整理することで北陸と浄土真宗との結びつきを示す基礎資料を整えるものである。

平成一七年度に行われた予備調査の成果をもとに、より精度の高い「善徳寺資料目録」を作成する目的から、平成一八年八月、大谷大学による本格悉皆資料調査を行った。調査対象は、善徳寺と看坊五か寺(真覚寺・伝栄寺・恵林寺・龍勝寺・浄念寺)の絵画・彫刻・工芸品・調度品・古文書などである。

善徳寺には加賀藩前田家との関係を示す貴重な調度品をはじめとする美術工芸品や真宗史料が所蔵され、その一部は富山県指定文化財としてよく知られている。本報告書では、資料目録に添えて、紙幅の都合上、学術的・史料的価値の高い物品のなかから、従来あまり知られていなかった事例数点に関し、その所見を記すことにしたい。

中世史料

善徳寺は蓮如の開基により砂子坂(石川県金沢市)に創建され、現在の南砺市城端の地へ移り来たと伝承されている。北陸の地は早くから法然の弟子が専修念仏を伝えたが、浄土真宗の祖師親鸞聖人が、いわゆる承元の法難で越後国府へ流罪となった経路にあたることで、早くから教化があったところとして今日も浄土真宗の信仰が殊に篤い地域であることはよく知られている。

本願寺八世の蓮如は本願寺七世存如の嫡子で、若くして父の右筆として教化を助けたが、北陸は父祖以来の有縁の地であり、本願寺の教化の拠点が次々と設けられた(一家衆寺院)ことから、北陸には蓮如に関する様々な伝承が語り継がれている。

このような北陸の宗教状況の一端は、善徳寺の法宝物に窺うことができるが、従来は伝承の域を出ず、善徳寺に伝わる資料の全体から捉えうることはできなかったし、また十分な精査がなされてこなかった。以下、六点について新所見を述べる。

・「十字名号」(一七〇一)

善徳寺のいわゆる「開創五尊」の一つで、虫干法会の際に開帳があり、よく知られた名号である。紺色地の絹本に金泥で光明を放射させた十字名号であるが全体的に剥落が激しい。未指定であるが、成立は南北朝期頃のものであることが確認された。善徳寺の開基本尊と思われる貴重な物品である。

・「聖徳太子・七高僧」(八)

聖徳太子と七高僧の御影は、真宗寺院に双幅の形で伝えられることが多く、蓮如上人の時代から普及するようになった。

この聖徳太子像は、定型化していない段階のもので、像容は法隆寺像に近く、真宗の聖徳太子像としては比較的早い時期のものである。両幅ともに善徳寺の「開創五尊」の内として、すでに県指定文化財とされている。

・「八祖連座御影」(四三)

「八祖連座御影」は、上から源信、法然、親鸞の順に八僧が描かれている絵像であるが、札銘が剥落しているため、すべての人物を比定することはできない。断片を見る限り、善徳寺の源流を示し、開創に関わるものと推断し得ないが、初期真宗の史料として貴重である。

・「六字名号(屏風隠れ御名号)」(一六八九)

善徳寺に伝来する「六字名号」の一つ。本件は、「屏風隠れ御名号」と伝承され、夏の虫干では蓮如上人の事蹟とともに語られている。この度の調査で、蓮如上人真筆の「六字名号」であることが確認された。

・「六字名号」(一六八七)

善徳寺に伝来する「六字名号」の一つで、親鸞真筆の六字名号と伝承されていたが、調査により、蓮如上人真筆の楷書による六字名号と認定された。

以上、善徳寺の中世真宗史料は、既知の史料を含めて数十点に上る。保存状態がよく、学術的に貴重なものが多い。

近世史料

善徳寺の近世は、早い段階で中本山・頭寺という地位が与えられた。このために近世善徳寺では住持の入寺問題が常につきまとった。基本的に本願寺一門の男子を迎えたが、しばしば後継難に陥った。善徳寺は近世初期から加賀藩との交際があったが、嘉永二年には、加賀藩主前田斉泰の第一〇男亮麿が善徳寺へ入寺する。善徳寺には、この時に加賀藩からもたらされた豪華な調度品の数々が伝えられ、その多くはすでに富山県の指定文化財となっている。

天明八年（一七八八）、京都の本山（現東本願寺）が市中大火によって、両堂（御影堂・阿弥陀堂）など伽藍が全焼した。再建事業は、本願寺第一九世乗如上人が志し半ばで没し、同第二〇世達如上人が再建を成し遂げた。従来、この再建に関して、史料的に各地の対応の実態がはつきりしていなかった。その意味で、次の二点の発見は大変重要である。

・「十字名号」（一七〇〇）

本件は、達如上人真筆の十字名号である。この名号軸の木箱蓋裏書には、「乗如上人之御代天明八年戊申春洛中就大火両御堂不残御類焼早束御再建被 仰出飛州山内之御木材／依御願四千六百七十本余從 公儀御寄附右御材木伐出從当御坊杣等夫食米御国主江相願國中之御門末／相勤メ右夫食不殘当御坊ヨリ運送有之依而本伐川下無滞御伐木庭着達如上人之御代両御堂御殿悉皆御成就／御満足思召寛政十年戊午秋為使者長井半弥御指下九月廿六日此名号御寄附之旨演説以相渡依而記之」とあり、幕府より飛騨の御用木四六七〇本が献木され、善徳寺がその運搬人夫の扶食米調達を加賀藩に交渉して許されたことにより、寛政一〇年九月二六日再建成就の善徳寺の功勞に對し下附されたものであると確認された。なお、善徳寺所藏古文書中に、村々からの夫食米寄進に関する史料が多数残存し、事実を裏付けている。

・「軍配」（二二六九）

軍配は、本願寺二二世教如上人より空勝僧都が拝領し、石山合戦に使用したものと伝えられており、県指定文化財である。軍配には木箱が備わるが、木箱は三ツ葉葵紋入の黒塗箱で、当初の軍配とは合致しない。その木箱底書には「御本山依 御再建飛州／御材木御用米運送三付／御指下／日丸御印箱／越中城端／御坊／寛政四年閏二月十五日」とみえ、寛政四年閏二月一五日にはすでに、善徳寺が幕府から

日の丸御印を与えられて京都本山の再建事業に関わっていたことが知られた。石山合戦における空勝僧都の伝承を有する軍配が、献木運搬の場面で二次的利用をされた可能性もあり、学術的に貴重な発見であろう。

寺本婉雅関係史料

寺本婉雅は、一八九九年、日本人で初めてチベットの地に足を踏み入れ、義和団（北清）事変の際には陸軍の通訳として従軍、またチベット語の大藏經（北京版『西藏大藏經』）を中国から日本へもたらした。日本の大学で初めてチベット語の講義をするなど、チベット研究はもとよりアジア文化の交流に寄与した仏教学者として知られる。寺本氏の論文や学問は知られているものの、その人物や事蹟については、従来、史料が不足しており判然としない。

寺本氏と城端は有縁の地で、宗林寺（南砺市城端）にいくつかの史料が現存し、このたび、善徳寺からも以下の物件が新発見された。

・「寺本氏収集書典籍」（一七八九）

木箱貼紙に「一、徳王李守信之書 壹幅／一、元代西藏文碑／一、文殊菩薩画像／一、寺本先生法名／一、仏陀三昧の浄土往生觀図式／一、西藏地圖三枚／以上軸物五本」とみえる。このうち現存するものは、「元代西藏文碑」、「文殊菩薩画像」、「寺本先生法名」、「仏陀三昧中の浄土往生觀」の四幅で、「徳王李守信之書」と「西藏地圖三枚」は散逸している。いずれも学術的に貴重であり、「元代西藏文碑」は京都大学人文科学研究所蔵品と一致する。「寺本先生法名」の裏書に、「昭和十四年十二月満州國々務院興寄の招聘に應じて渡満し蒙古喇嘛藏の寶院を調査し喇嘛教超及び同教國穢氏來ル老体の身を以つて出國の小時遺書在り」と記し、さらにその下にはペン字で「故寺本先生眞筆法名 昭和三十七年十一月十九日新調 默働云」とみえている。

・「寺本婉雅将来品一式」（二二二七）

上記のほか、「中国義和団兵服」も寺本将来物件である。裏書きに「仏嚴寺 明治三十三年清国義和団什物 用服 従軍者 寺本寄付」とあり、従軍の史実を裏付けるだけでなく、義和団兵服は資料的に珍しい。

寺本関係の資料、また義和団に関する史料があまり見られない中で、これらの資料が発見されたことは貴重である。日本近代におけるアジア文化・交流史研究と

して学術的に内外に重要な発見である。

大谷貞子関係史料

下倉一階には、大谷貞子の遺品が、多数納められている。

大谷貞子は、善徳寺第一八代住職宝香院の長女で、大正元年（一九一二）、第一九代住職成満院と結婚。大正三年（一九一四）、病床に伏し、二五歳の若さで死去した。大谷婦人会は、単なる善徳寺住職夫人にとどめず、貞子を「貞子姫」と呼び、大谷婦人会のシンボルとして、没後早い段階から聖性を付帯した。「貞子姫」の遺品は、虫干法会において、大谷婦人会の手によって、宝物展覧における順路の一番目にあたる新御殿に展示され、遺品を解説し、「婦人会は今日に到る迄遺徳をお慕い申し、菩提を弔うている次第であります。何卒御焼香お参り下さいまし」と締めくくる。大谷貞子の遺品は、資料的稀少性が認められるものというよりは、善徳寺の虫干法会の成立と展開の問題を考えていく上で貴重な資料の一群である。

法宝物縁起

善徳寺の年中行事の一つに、毎年七月下旬に行われる虫干法会がある。虫干法会は、善徳寺や五か寺の僧侶の手になる法宝物開帳と、善徳寺近隣の真宗門徒地域住民の手により法宝物の大部分が公開される行事である。

法宝物開帳が、いつ行われるようになったのかについては、明治一九年（一八九六）に始まったとされるが、文献的には遡り得ない。

法宝物開帳は、「蓮如絵伝」の絵解き、「蓮如坐像」の開帳に始まり、諸殿を巡りながら「親鸞坐像」、「親鸞立像」、また「八祖連座御影」、「聖徳太子御影」、「七高祖御影」、「十字名号」、「左上の御影」「親鸞御影」などいわゆる「開創五尊」の開帳、梅檀香木の「阿弥陀如来立像」、善徳寺第六代「空勝坐像」と「軍配」、伝法然真筆の「六字名号」、そして「聖徳太子二歳像」の開帳が行われる。これらには「祖師聖人御影縁起」（二〇）や「八祖連座御影縁起」（四三）など、絵像や木像に「縁起」が備わり、開帳の作法もまた縁起拝読の上に、法話が加わり、さらに万人講志を募るのである。

このような「縁起」は法宝物虫干展覧においても披露される。たとえば、「六字名号縁起」（一六八六・屏風隠御名號）や「中河内大蛇濟度名号縁起」（一六九一）がそれである。また宝物館にも「紺地金泥大般若經縁起」（四八二）が認められる。しかし、

このたびの調査により、これらのほかに「糸引名号縁起」（二六八五）、「六字名号縁起」（一六八九・屏風隠御名號）、「六字名号縁起」（二六八八・教如上人六字尊號）、「六字名号縁起」（一六九〇・教如上人六字尊號）、「八祖連座御影縁起」（四二）、「八祖連座御影縁起」（四一）などが確認され、同一の伝承を有する物件が二点以上存在すること、現在は語られなくなった縁起が認められるなど、近隣の井波別院瑞泉寺にもみられる巡回布教を鑑みれば、布教のあり方や地域性、虫干法会の歴史の変遷を考える上で興味深い。これらの「縁起」の中に「明治天皇より」という文言が見えるように、多くは大正以降の成立と思われるが、城端地域の脈々と受け継がれた伝承がその基盤にあることはいうまでもない。

まとめ

城端別院善徳寺が、城端地域の住民はもとより本山や加賀藩などといかに関係しながら今日に至ったかは、現存する資料群からよく知ることができる。真宗に関する法宝物や荘厳具などが多数確認されることは改めて述べるまでもないが、上述の物件以外に柳宗悦との結びつきによる地域性をもった民芸品も多数伝来している。

善徳寺の法宝物の多くは豊かな伝承世界と結合し、伝承とともに伝えられているものが多いことも特徴の一つである。それは蓮如との関係において伝承されているものが多く、北陸・城端の地域性をよく表しているといえよう。

真宗関係資料からは、真宗寺院としての法儀・法脈の継承、あるいは真宗門徒の真宗信仰や在地伝承など宗教的側面を知ることができ、それは北陸真宗の定型の一つといえよう。また亮暦の調度品からは、前田家との交際の実態とその生活だけでなく、大谷貞子関係資料と併せ、おおむね大正期から昭和初期における城端別院の財政再建整備事業を背景とした別院と門徒の対応が、虫干法会として今日に伝えられているものと考えられる。虫干法会という年中行事が、図らずも今日にまで貴重な法宝物の散逸を防ぎ、手入れし、その縁起を語り継ぐことになったと思量される。